

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)・2)・3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1) 文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。2) 被災文化財関連情報に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。3) 文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	○江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（研究員）、安永拓世（研究員）、米沢玲（研究員）、小山田智寛（研究員）、阿部朋絵（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

- 全所的な文化財情報の発信：4半期ごとにアーカイブズWG協議会を開催し（5月13日、8月6日、10月18日、2年3月31日）、アーカイブの拡充と積極的に情報発信を行うための協議を行った。
- 美術資料のデータ化と公開：永青文庫所蔵「洋人奏楽図屏風」に関するデジタルコンテンツ等を作成し、資料閲覧室内専用端末にて公開を開始した。
- 所蔵図書・雑誌資料の書誌情報の標準化と所蔵資料管理の改良：約30万件の蔵書について、図書館システムを稼働し、バーコード管理整備を開始した。
- 売立目録デジタル・アーカイブの公開：当研究所及び東京美術倶楽部所蔵の売立目録約2500冊収載内容のテキストと画像が検索できるシステムを開発し、5月8日より公開開始して研究情報を提供するとともに、さらなる活用を目指して2年2月25日に公開研究会を行った。
- 資料閲覧室の運営・管理 資料受け入れ数：和漢書1853件、洋書777件、展覧会図録・報告書等1355件、雑誌2720件（合計6705件）・閲覧室利用状況：公開日総数125日・年間利用者合計988人



売立目録デジタルアーカイブ検索画面

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、国際的なオープンアクセス需要への対応のため、当研究所の活動と研究成果を広く周知することを継続的に行った。②独創性においては、当研究所が有する専門性・独自性の高い文化財情報の公開を念頭におき、唯一無二の『売立目録』のデジタルアーカイブの公開と改良を進めた。③発展性においては、国内外の関係機関と連携して、国内外への情報発信を積極的に行い、研究会などを通じて連携を強化した。④効率性においては、今年度より稼働した図書館システムを活用し、入力作業を効率よく行った。⑤継続性においては、当研究所が有する情報・画像資料のデジタル化作業を年間通じて順調に進めた。あわせて、高い利便性と安定した資料の保管の双方に配慮しつつ、資料閲覧室としての公共性と高い専門性を保持した運営を行い、週3回、一般利用者への所蔵資料の提供を行った。以上により、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	A	A

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) 美術に関する情報公開 1件 (ア, イ) 研究会等発表 2件 (ウ, エ)	定量評価
		—

- ア 売立目録デジタルアーカイブの公開 (5月)
- イ 永青文庫所蔵「洋人奏楽図屏風」に関するデジタルコンテンツ公開 (2年1月)
- ウ 江村知子「日本美術の記録と評価についての研究—「田中一松資料」の保存活用」東京文化財研究所総合研究会 (2年1月7日)
- エ 安永拓世・山口隆介・山下真由美・月村紀乃「売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望—売立目録の新たな活用を目指して—」東京文化財研究所文化財情報資料部研究会 (2年2月25日)

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	元年度は、文化財研究の専門機関として国内外から重要視されていた売立目録についてデジタル・アーカイブを完成・公開し、研究支援を飛躍的に推進した。あわせて資料閲覧室としての公共性と専門性の双方を有する運営を進めることができた。2年度以降も当研究所が行う文化財の調査研究とその成果を集約しつつ、データベースの継続的拡充を行い、専門的アーカイブと総合的レファレンスの充実を推進する。

【書式C】

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 2411F

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。特に全国遺跡報告総覧を充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○渡邊晃宏（文化財情報研究室長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）	

【年度実績と成果】

- 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている報告書抄録、報告書の各データベースに関し、データの入力・更新を行うとともに、公開データベースを更新した。
- 全国遺跡報告総覧の登録データ件数 () 内は 30 年度末の値
PDF 数 24,008 件 (23,075)
書誌登録数 63,994 件 (48,694)
遺跡抄録件数 128,125 件 (93,923)
- 文化財報告書の電子公開に関する理解を深めるために「報告書データベース作成に関する説明会」を全国 5 か所で開催した。

主催：奈良文化財研究所
共催：佐賀県，新潟県教育委員会，広島県教育委員会，愛知県教育委員会，国立大学法人島根大学附属図書館，全国遺跡報告総覧プロジェクト
後援：文化庁，全国埋蔵文化財法人連絡協議会，全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会





年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】					
①適時性においては、最新のデータを提供して充実を図っている。②独創性においては、全国遺跡報告総覧のように他に類を見ないデータを提供しており、独自のデータ解析も提供している。③発展性においては、既存のデータベースの内容を着実に充実させているとともに、データベースの機能強化を実現している。④継続性においては、大規模なデータベースを維持し、確実なデータ提供を多年に渡って実現している。これらより、内容豊かなデータベースとして著しく発展していることから、順調に事業が推移していると判断し、全体の評定をAとした。					
観点	① 適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	A	A	B	
【目標値】 ・文化財に関するデータベースの公開件数 24 件		【実績値・参考値】 () 内は 30 年度末の値 (実績値) 公開データベースの件数 25 (24) 「史的文献データベース連携検索システム (実証試験版)」を新たに公開した。 (参考値) 公開データベースへのアクセス件数 8,619,158 件 (12,615,841) 全国遺跡報告総覧 登録データ件数 : 216,127 (165,692) 年間ダウンロード件数 1,702,047 (1,416,171) 年間ページ閲覧数 68,184,920 (103,027,968) 論文発表 5 件 (ア) 口頭発表 4 件 (イ)			定量評価
					B
ア論文 高田祐一「Prospects and potential for the comprehensive database of archaeological site reports in Japan」他 4 件 イ研究発表 高田祐一「デジタル技術を活用した発掘調査報告書のアクセス性向上の試行」他 3 件					

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	文化財情報に関する基礎的な研究を積み重ねつつ、継続性が重要なデータベースの充実を着実に進めている。他機関と協力して進める大規模データベースである全国遺跡報告総覧は、頻出用語表示機能などのデータ解析機能を付加し、データのダウンロードも 141 万件以上に達するなど、中期目標を超える成果を継続して達成しており、今後の発展も引き続き期待される。

中期計画の項目	(4)-①-3)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	(4)-①-3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 3)文化財に係る図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。 【中期目標・計画上の評価指標】 ・図書、雑誌等の公開に関する取組状況 (資料閲覧室・図書資料室の開室日数、利用者数、文化財に関する資料・図書等の総件数) ・文化財に関するデータベースの公開件数（前中期目標の期間の実績以上） ・(関連指標)データベースのデータ件数 ・(関連指標)データベース等へのアクセス件数
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○貴村好隆（連携推進課長）渡 勝弥（係員）伊藤久美（事務補佐員）山内章子（事務補佐員）中西晶子（事務補佐員）堀内千嘉（事務補佐員）永岡美和（事務補佐員）久保純子（事務補佐員）志賀明美（事務補佐員）	
【年度実績と成果】 ・資料の収集・整理・保管・提供 書庫内において資料の配置場所が明確になるように表示板を増やして資料の配置が分かりやすくなるように工夫した。 ・書庫内に閲覧机を増設することにより、書庫内における閲覧スペースの拡張を行った。 ・閲覧室の照明器具を増設することにより、閲覧机上の明るさを増強した。 ・研究室が管理する資料の遡及登録を開始した。		
購入図書	199 冊	 照明を増強した閲覧室
寄贈図書	7,061 冊	
雑誌	2,423 冊	
一般利用者	229 人	
利用冊数	1,990 冊	
来館者複写件数	758 件	
遠隔利用：複写受付件数	405 件	
貸借貸出冊数	102 冊	

年度計画評価		A				
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性において、光度不足だった閲覧室に照明器具を増設することにより、資料を閲覧しやすい環境となった。②発展性において、研究室が管理している資料を図書館システムに登録することにより、蔵書検索システムへの反映など、所内全体での利用が容易となった。③効率性において、書庫内に閲覧机を増設することにより、研究員の調査・研究に更なる利便性の向上を図った。また、図録の配架場所に都道府県別の仕切り板を入れ、資料の配架状況を分かりやすくしたことにより、資料の調査及び配架作業の効率化を図った。④継続性において、従来の継続的な業務を滞りなく行った。以上の観点から本事業は順調に推移していると判断した。						
観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性		
定性評価	A	A	A	A		
【目標値】		【実績値・参考値】				定量評価
		(参考値) 資料閲覧室・図書資料室の開室日数 198 日 資料閲覧室・図書資料室の利用者数 278 人 文化財に関する資料・図書等の総件数 480,023 件				—

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。
評定理由及び今後の見通し	閲覧室の照明器具増設及び書庫内の閲覧机増設など、一般利用者及び所内研究員が図書資料を利用するうえで、更なる利便性の向上を行った。 また、研究室管理の資料を図書データベースに登録したことにより、今後の資料の利用拡大が大いに望めるものと思われる。

【書式C】

施設名 東京文化財研究所

処理番号 2421E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1) 定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』 ・『東京文化財研究所概要』 ・『東文研ニュース』 ・『美術研究』（年3冊） ・『日本美術年鑑』 ・『無形文化遺産研究報告』 ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』 ・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○齊藤孝正（所長）	
【年度実績と成果】 ・『東京文化財研究所年報』2018年度版 ・『東京文化財研究所概要』2019年度版 ・『東文研ニュース』年3回（70～72号） ・『美術研究』（428号）（9月） ・『美術研究』（429号）（2年1月） ・『美術研究』（430号）（2年3月） ・『平成30年版 日本美術年鑑』（2年3月） ・『無形文化遺産部研究報告』第14号（2年3月） ・『第14回無形民俗文化財研究協議会報告書』（2年3月） ・『保存科学』59号（2年3月）		
		
保存科学59号表紙		

年度計画評価		B			
【評定理由】					
下記各観点から評価を行なった。①適時性においては、『美術研究』で論文翻訳により海外での最新研究動向を紹介できたこと、『日本美術年鑑』において近年の動向をきちんとまとめて報告した点が評価される。②独創性においては、『美術研究』429号の神谷嘉美論文で、桃山期平蒔絵技法について実証的な研究を行った点などが注目される。③発展性においては、『美術研究』429号において当研究所の文化財データベースの実態について報告することで、所内外への幅広い展開が期待される点がある。④効率性については、『保存科学』において、編集委員を交代し、作業効率を上げた。また『美術研究』の編集作業で昨年同様、刊行物アーカイブシステムを本格的に導入した点や、電子メール送受による校正作業を積極的に実施して刊行に必要となる時間の節約に努めた点が評価される。⑤継続性については、定量評価においては、所期の予定通り12点の定期刊行物を刊行することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	A	B
【目標値】		【実績値・参考値】			
・定期刊行物等の刊行件数 12件		（実績値）定期刊行物等の刊行件数 12件（以下のとおり） 『東京文化財研究所年報』2018年度版 刊行部数 400部 『東京文化財研究所概要』2019年度版 刊行部数 2,700部 『東文研ニュース』70～72号 刊行部数各 1,600部 『平成30年版 日本美術年鑑』 刊行部数 600部 『美術研究』428～430号 刊行部数各 400部 『無形文化遺産研究報告』第14号 刊行部数 500部 『第14回無形民俗文化財研究協議会報告書』 発行部数 500部 『保存科学』59号 発行部数 650部			
		定量評価			
		B			

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	中期計画4年目となる元年度も所期の計画通り、各研究プロジェクトの研究成果を反映させた定期刊行物を刊行することができた。31年度以降も、学術誌としての一定の水準を保ちながら、また当研究所の事業内容を一般に広報する上でも有益な内容の報告書となるよう今後とも努める予定である。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	(4)-②-1) 2) 3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1) 定期刊行物の刊行、・『奈良文化財研究所紀要』、・『奈良文化財研究所概要』、・『奈文研ニュース』 2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等、・公開講演会
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○貴村好隆（連携推進課長）、溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、渡 勝弥（連携推進課）ほか	

【年度実績と成果】

◆定期刊行物の刊行

- ・奈良文化財研究所概要 2019 7月刊行、3,000部
- ・奈良文化財研究所紀要 2019 6月刊行、3,000部
- ・奈文研ニュース「No.73」6月、「No.74」9月、「No.75」12月、「No.76」2年3月
- ・埋蔵文化財ニュース 2年3月「No.178」「No.179」「No.180」「No.182」

◆現地説明会

- ・6月7日平城宮跡大極殿院地区の発掘調査(平城第612次)現地説明会 於奈良市法華寺町他(参加者180人)
- ・9月29日平城宮東方官衙地区の発掘調査(平城第615次)現地説明会 於奈良市法華寺町他(参加者892人)
- ・10月6日藤原宮大極殿院の発掘調査(飛鳥藤原第200次)現地説明会 於橿原市高殿(参加者971人)

◆講演会

- ・6月15日第124回公開講演会 講演者：前川、松田、村田(参加者149人)
- ・10月5日 第11回東京講演会タイトル「奈良の都、平城の謎を探る」
講演者：内田、今井、桑田、小田、神野、福嶋、渡辺(参加者464人)
- ・11月9日第125回公開講演会 講演者：松永、山口、内田(参加者150人)

◆シンポジウム

- ・10月11日 第1回 報告書データベース作成に関する説明会 11月21日 第2回 12月4日 第3回 2年2月4日 第4回 2年2月17日 第5回
- ・12月13日～14日 第23回古代官衙・集落研究集会「灯明皿と官衙・集落・寺院」(参加者104人)
- ・2年2月1日～2日 第20回古代瓦研究会シンポジウム(参加者244人)

◆体験型イベント

- ・8月8日～9日「つくろう!!ミニチュア玉枕」(飛鳥資料館)阿武山古墳から出土した玉枕のミニチュアをビーズで作るイベント(参加者110人)
- ・8月21日～22日「奈良の都の木簡に会いに行こう!2019」子供達が発掘現場から持ち帰った木簡を含む土の洗浄・選別作業や木簡の解説等の体験を行った。(参加者41人)(日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」採択事業)
- ・10月29日「飛鳥の森を探る」(飛鳥資料館)飛鳥の森を紹介し、資料館の庭園の葉っぱを使って自分だけの「あすか森しおり」を作る体験を行った。(参加者17人)
- ・11月15日「ふるさと飛鳥を語る」(飛鳥資料館)地元のご老人による飛鳥の自然と人にまつわるお話し。(参加者37人)

◆ウェブサイトの充実

- ・薬師寺典籍文書データベース、大宮家文書データベース、考古関連雑誌論文情報補完データベース、遺跡報告内論考データベースの各データベースをクラウド化し、運用と公開の効率化を図った。
- ・奈文研ブログ「コラム作寶樓」月2回更新、新たに7月より毎月1研究室を紹介する「巡報研究室」の配信を開始した。



奈文研ニュース

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性については、調査研究成果を適時に刊行し、現地説明会開催、ウェブ公開とも適時に情報を発信した。②独創性については、調査研究内容の新規性及び卓越性を持たせ発信することができた。③発展性については、個々のデータベース登録数も増え、多様なブログ、新規コラム等を更新することによりHPの内容を一層充実させた。また、当研究所の調査研究の成果を多角的に発信するために体験イベントを実施した。④継続性については、定期刊行物、講演会、ウェブ公開など従来から継続的に実施しているうえ、データベースをクラウド化するなどし、恒久的な提供が認められる。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	A	A	
【目標値】		【実績値・参考値】			定量評価
(1) 定期刊行物等の刊行件数 10点		(実績値) (1) 定期刊行物等の刊行件数 10点			(1) B
(2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 10回		(2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 13回			(2) A

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	目標を上回る回数の公開講演会や現地説明会等を実施し、調査研究成果を適時、多角的に発信している。また、全国遺跡報告総覧などウェブサイトの利用率も順調に上昇している。今後も公開講演会、現地説明会、ウェブサイトの充実等を通じて調査研究成果を適時発信していきたい。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	令和元年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、小野真由美（主任研究員）、塩谷純（文化財情報部長）ほか	
【年度実績と成果】		
○11月1日、2日の2日間にわたり、専門家はもとよりひろく一般からも聴講者を募集し、オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」を開催した。		
○当研究所より2人、外部より2人の講演を行った。それぞれの講演テーマは次の通りである。		
・米沢玲（文化財情報資料部研究員）「大徳寺伝来五百羅漢図と『禅苑清規』一描かれた僧院生活」		
・原浩史（慶應義塾志木高等学校教諭）「広隆寺講堂阿弥陀如来坐像のかたちと込められた願い―願主「永原御息所」の人物像を起点として―」		
・小林公治（文化財情報資料部広領域研究室長）「日本唯一の伝世洋剣、水口レイピアの調査と研究」		
・田中眞奈子（昭和女子大学歴史文化学科）「SPRING-8による刀剣研究最前線：制作技術の解明に向けて」		
○外部からの聴講者は11月1日が96人、2日は55人の参加を得た。		

オープンレクチャーの様子

年度計画評価		B			
【評定理由】 下記の各観点から評価を行った。①適時性においては、両日あわせて 151 人の参加をみたが、専門家以外の一般参加者が多かった。参加者からのアンケート結果では、11 月 1 日の 67 人の回答者のうち、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ 88.8％、11 月 2 日の 52 人の回答者のうち「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせて 90.4％の回答を得ることができ、時宜に適った講演テーマにて実施できた。②独自性においては、近年の研究誌にて発表された各テーマにもとづき、最新の研究成果を、新知見を織り交ぜて公開することができた。③発展性においては、いずれの講演も今後の調査研究による進展が期待されるものであり、そうした発展的成果を公開することができた。④継続性においては、「古典の日」にちなんだ台東区「上野文化ゾーンフェスティバル」の一環として長年継続して開催しており、例年通りの開催を達成することができ、アンケートからも参加者の高い満足度を確認できた。よって、順調かつ効率的に推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B
【目標値】 ・講演会の開催回数 1 回	【実績値・参考値】 (実績値) 1 回				定量評価
					B

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	30年度に続き、今中期計画4年目にあたるプロジェクト事業を計画通り達成できた。2年度も同様に「かたちからの道、かたちへの道」をテーマとして、講演者2人、2日間の形態で開催する予定である。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 3) ウェブサイトの充実 ・東文研総合検索システム ・東京文化財研究所刊行物一覧 ・学術情報リポジトリ
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（研究員）、三島大暉（アソシエイトフェロー）、逢坂裕紀子（研究補佐員）、安岡みのり（研究補佐員）、丸山礼（研究補佐員）、手呂内孝憲（研究補佐員）	
【年度実績と成果】		
○ネットワーク環境の整備・充実 ・無停電電源装置（UPS）及びUPSと連携した停電時の自動停止システムの整備、サーバ上のデータのバックアップシステムの更新を実施、ネットワークの安定運用に努めた。また、高精細画像などの安定した保管のため、長寿命の光ディスクによる記録を行う機器を導入した。		
○情報セキュリティの強化 ・30年度に引き続き、各職員の端末を含むネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を行い、国立文化財機構内他施設の担当者と情報交換しセキュリティ水準の維持向上に努めた。 ・当研究所職員の情報セキュリティへの意識向上を目的に研修を開催した（情報システム部会令和元年度研修会（10月1日）、講師：三島、小山田）。		
○情報蓄積・発信機能の強化 ・2件のウェブデータベース（新海竹太郎資料、内国勸業博覧会美術出品目録）の新規公開、既存データベースへのデータ追加や機能改善を実施した。また、30年度に引き続き、文化財アーカイブズ研究室及び近・現代視覚芸術研究室と連携し、データベース管理システムOracleによる所内データベースを適宜改良して利便性を向上させた。		
○研究成果公開 ・論文や学会発表を通じてデータベース構築関連の成果を公表した。また、プロジェクト「文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究」と連携し12月2日に「文化財の記録作成とデータベース化に関するセミナー」を開催、123人の参加を得た。		

年度計画評価	A				
【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、データベースへのアクセス件数やセミナーの参加者数にも裏付けられるように、データベースの構築、新規公開やデータ追加は我が国の文化財に対する国内外の関心にこたえ、時宜に適ったものである。②独創性においては、公開データベースに無料のデータベースエンジン MariaDB とウェブコンテンツを統合的に管理する無料の content management system (CMS)である WordPress を利用して独自開発し、その成果に関する国際学会での報告も受理されている。③発展性においては、横断検索が可能で、画像及びテキストの両方を扱えるデータベースの構築を継続、今後のデータベースの多様化にも対応した。④効率性においては、所内向け研修により情報システムセキュリティへの理解を向上させた。また当研究所職員を講師とするセミナーの開催により所外に効果的に活動内容を伝達できた。⑤継続性においては、ウェブサイト更新による情報発信、セキュリティ水準向上への対応も継続的に実施した。⑥定量評価について、目標値の 167%のデータベースを継続して公開した。よって所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	A	B
【目標値】		【実績値・参考値】			定量評価
・データベースの公開件数 18 件		・(実績値) データベースの公開件数 30 件 ・(参考値) データベースのデータ件数 1,288,551 件、データベース等へのアクセス件数 2,989,314 件・学会発表件数 4 件 (ア)・論文 1 件			A
ア Tomohiro OYAMADA, Yoko FUTAGAMI, Taiki MISHIMA 「Two solutions for orthographical variants problem」(2019 CIDOC annual conference、Inamori Memorial Hall、9月3日)ほか3件					
イ 小山田智寛「文化財データベースの作成とその意義について」『美術研究』429号、2年3月					

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。
評定理由及び今後の見通し	上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の目標を達成した。2年度以降も、運営費交付金や外部資金による他プロジェクトと連携、効率的に調査研究を実施する。また、調査研究及びウェブを活用した成果公開のための情報基盤の整備を行い、データベースや情報公開についての国内外の状況に関する事例調査を実施して、文化財情報データベースの機能をさらに拡充する。

中期計画の項目	2-(4)-③-1)	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。 1) 特別展・企画展
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○加藤真二（企画調整部展示企画室長）、○石橋茂登（飛鳥資料館学芸室長）ほか	
【年度実績と成果】		
○平城宮跡資料館 ・春秋特別企画展「高御座―奈良朝の玉座」（4月22日～6月2日）（33日間・14,456人） ・夏期企画展「ならのみやこのしょくぶつえん」（7月20日～9月1日、9月5日）（34日間・9,162人） ギャラリートーク2回、ワークショップ2回 ・秋期特別展「地下の正倉院展―年号と木簡」（10月12日～11月24日）（37日間・13,257人） ギャラリートーク3回 ・新春ミニ展示「平城京の子」（2年1月4日～1月26日）（20日間・4,456人） ・冬期企画展「発掘された平城2019」（2年2月1日～2月26日）（22日間3,515人）ギャラリートーク2回（※2年2月27日～3月29日の間は新型コロナウイルス対策として臨時休館とした。） ・第一次大極殿における幢幡レプリカ特別公開（4月27日～2年1月5日） ○飛鳥資料館 ・春秋特別展「骨ものがたり―環境考古学の研究室のお仕事」（4月23日～6月30日）（61日間・10,024人）関連イベント「体験！研究員のお仕事」3回、「研究員を展示！」4回。 ・夏期企画展「第10回写真コンテスト作品展「あすかの古墳」」（7月19日～9月1日）（40日間・3,070人） ・秋期特別展「飛鳥―自然と人と」（10月11日～12月1日）（44日間・6,506人）関連イベント「飛鳥の森を探る」「ふるさと飛鳥を語る」 ・冬期企画展「飛鳥の考古学2019」実施（2年1月24日～2月26日）（29日間、1,331人）（※2年2月27日～3月15日の間は新型コロナウイルス対策として臨時休館とした。） ○藤原宮跡資料室 ・常設展示に加え、ロビーにて①『藤原宮木簡四』刊行記念の木簡特集展示「埋（うず）もれた大宮びとの横顔―葉・まじない・庄園の木簡」（4月8日～4月26日）、②都城発掘調査部藤原地区の2018年発掘調査成果速報展示（7月1日～12月27日）実施。		
 平城「ならのみやこのしょくぶつえん」ワークショップ		



平城「ならのみやこのしょくぶつえん」ワークショップ

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、平城で新天皇の即位、新元号の発布を記念して、高御座展、元号に関わる木簡展、幢幡レプリカの特別公開を実施できた。また、藤原においても『藤原宮木簡 四』の刊行にあわせた特集展示を行えた。②独創性においては、平城夏展は、奈良国立博物館と連携したもので、同館の「祈りの世界の動物たち」展と同時期に開催した。奈良にある国立文化財機構の施設同士がはじめて連携し、関連のあるテーマの展覧会を行うという試みであった。まさに奈良ならではの企画だったといえる。また、飛鳥春展でも埋文センター環境考古学研究室とその研究員を展示するなど、奈文研ならではの独創的な展示を行うことができた。③発展性においては、平城夏展で英・中・韓国語版のリーフレット・チラシ、飛鳥春展で英・中・韓国語版パンフレットを作成し、展示の多言語化のノウハウを培った。平城夏展では、造花類を多用するとともに、切り花・切り枝の真空パック展示を試みるなど、植物の展示方法を探った。また、飛鳥秋展は地元の地域社会・環境を強く意識した展示でもあり、これからの展示・活動の方向性を示している。④継続性においては、各館の特別展・企画展は、ほぼ定期で継続的に実施するが、内容を変えつつ、飛鳥の関連イベントや平城のワークショップやギャラリートークなども充実させ、新たな入館者層の掘り起こしやリピーターの獲得を目指している。定量評価について、平城では特別展・企画展を年間5件開催し、目標値を超えた。また、飛鳥では年間4件の目標値を達成できた。以上から、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	A	
【目標値】		【実績値・参考値】			定量評価
(1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数4件 (2) 飛鳥資料館特別展・企画展開催件数4件		(実績値) (1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数5件、特別公開1件 (2) 飛鳥資料館特別展・企画展開催件数4件 (参考値) (1) 平城 入館者数71,408人 開館日数278日 図録等実績リーフレット等6件（ア～カ） (2) 飛鳥 入館者数26,966人 開館日数306日 図録等実績：リーフレット等3件（キ～ケ） (3) 藤原 入館者数7,945人 開館日数270日			B
ア～エ『ならのみやこのしょくぶつえん』（A4版変形フルカラー24頁、日本語・英語・中国語・韓国語版7月20日） オ『地下の正倉院展一年号と木簡一』（A4判フルカラー16ページ 10月12日） カ『発掘された平城2019』（A4判フルカラー8ページ 2年2月1日発行） キ 飛鳥資料館図録第71冊『骨ものがたりー環境考古学研究室のおしごと』（A5判フルカラー143ページ 4月23日） ク 飛鳥資料館図録第72冊『飛鳥ー自然と人とー』（A5判フルカラー103ページ 10月11日） ケ 飛鳥資料館カタログ第36冊『飛鳥の考古学2019』（A4判フルカラー20ページ 2年1月24日） コ 飛鳥資料館研究図録第23冊『骨ものがたりー環境考古学研究室のおしごと 展覧会報告』（A5判フルカラー 2年3月31日）					

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、公開施設における特別展・企画展の開催件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成する。
評定理由及び今後の見通し	各館の目標値：特別展・企画展年間4件を平城は5件＋特別公開1件、飛鳥は4件と順調に達成した。来館者の理解向上に向け、「ならのみやこのこうこがく（仮）」（平城）、「日本人と古代仏教—仏教と文字文化の考古学（仮）」（飛鳥）などの展示プロジェクトの実施を頑張りたい。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進するとともに、日本博関連展示を行う。 2) 定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○貴村好隆（連携推進課長）、溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、岩井靖子、京牟礼薫、前田照恵、林尚代（連携推進課事務補佐員）	
【年度実績と成果】		
○解説ボランティア研修等 解説ボランティアの育成に資するため、平城宮跡資料館及び平城宮跡歴史公園平城宮いざない館（受託事業）における特別展、企画展にかかわる解説ボランティアに向けての展示解説研修の実施、発掘調査の現地説明会、及びボランティア勉強会を実施した。 ・平城宮跡資料館特別企画展「高御座」展示解説研修 4月26日（1日3回実施） ・平城宮跡資料館夏のこども展示解説研修 7月19日・22日（22日は1日2回合計3回）（展示研修及び来館者向けクイズの回答対応研修） ・平城宮跡歴史公園平城宮いざない館研修 7月19日・22日（22日は1日2回合計3回）（平城宮跡資料館夏のこども展示関連の来館者向けクイズの回答対応研修） ・平城宮跡資料館「地下の正倉院展」展示解説研修 10月11日・15日（Ⅰ期）、10月28日（Ⅱ期）、11月11日（Ⅲ期） ・平城宮跡資料館新春ミニ展示展示解説研修（ボランティア用展示解説シートを作成し各個人に配付） ・平城宮跡資料館「発掘速報展」展示解説研修 2年1月31日・2年2月3日（3日は1日2回合計3回） ・解説ボランティア向けの発掘調査の現地説明会 6月5日（平城宮第一次大極殿院地区）、9月27日（平城宮東方官衙地区） ・解説ボランティア勉強会 4月15日・20日、8月17日・19日、12月16日（平城宮跡に関する内容等について実施）		
○解説ボランティアに関する会議 ・平城宮跡解説ボランティア懇談会の開催（研究部と事務部が一体となったボランティア活動を検討する会議、毎月1回開催） ・平城宮跡解説ボランティア連絡会議の開催（解説ボランティア班長と奈文研職員によるボランティア活動の確認、活性化、改善等を検討するための会議、毎月1回開催） ・平城宮跡歴史公園ガイド連絡協議会（NPO法人平城宮跡サポートネットワーク、奈良県（平城京 再生プロジェクト）、国交省（平城宮跡管理センター）4者で行う国営飛鳥歴史公園内のボランティア活動等の情報共有、意見交換を行う会議：2か月に1回開催）		

年度計画評価		A			
【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性については、解説ボランティアへの研究所からの最新の情報提供、解説ボランティアからの改善等の意見を随時取り入れるための「平城宮跡解説ボランティア連絡会議」、解説ボランティアからの意見を検討するため研究部と事務部が一体となって組織した「平城宮跡解説ボランティア懇談会」を定期的に開催したことにより、研究所におけるボランティアの情報発信内容等が効果的に進んでいる。②独創性については、解説ボランティアの資質向上のため、平城宮跡における当研究所の最新の調査研究成果を踏まえた勉強会、発掘調査現地説明会を実施するとともに、展示内容に即した解説研修を適宜企画し実施した。③発展性については、勉強会、研修を実施するとともに班長出席による連絡会議を毎月実施し、ボランティアからの意見を随時取り入れるようにすることで、活動の活性化や運用改善が進められた。④継続性については、新制度による活動が順調に進んでいると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値)			定量評価
		・解説ボランティア登録人数：148 人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：72,491 人 ・解説活動日数：274 日			—

中期計画評価	A
中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、公開施設における特別展・企画展の開催件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。また、宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成する。
評定理由及び今後の見通し	平城宮跡解説ボランティアについては、30年1月から新たなボランティア制度のもと、定期的な勉強会、展示研修等を通じて、解説ボランティアの育成を行い、資質の向上に努めた。また、解説ボランティア連絡会議を定期的に開催して解説ボランティアの意見等を取り入れつつ、円滑な活動を実施している。今後も本制度を継続運用し、随時見直しを行い、更に効率的、効果的な運用になるよう努めていきたい。